

一人ひとりの塾生の「一流校」全員合格を目指して

- 非受験学年でも各自の「一流校」合格の早期取り組みを -

開倫塾

塾長 林 明夫

1. はじめに

(1)開倫塾の校長の使命とは何か。それは、校舎の経営責任者としての自覚をもち、校舎のスタッフ全員をまとめ上げ、強烈なリーダーシップを発揮し、塾生一人ひとりに各自の「一流校」を一日も早く自らの力で決定させ、各自の「一流校合格」に向けての取り組みを一日も早くスタートさせることに尽きます。

(2)開倫塾の特色は何か。それは塾生一人ひとりの「一流校」の合格を果たすことです。開倫塾独自の「一流校」の定義の相対性にあります。開倫塾における「一流校」とは「塾生の進学を希望する学校」を意味します。「偏差値 60 の塾生にとっての一流校」と「偏差値 40 の塾生にとっての一流校」は異なって当然であります。この塾生を合格させるべき「一流校の定義の相対性」、つまり「塾生一人ひとりは一류校は異なる」ことが、開倫塾と他の学習塾との決定的な違いであり、最大の特色であります。

(3)合格のための準備は早ければ早いほどよい。The Sooner, the better.であります。校長は、受験学年は当然のこととして、非受験学年であっても、一日も早く全塾生に自らの一流校の決定を促し、その準備を一日も早くスタートさせる全責任者であることを自覚して下さるよう希望します。

2. 授業では「理解」を。授業中に「定着」「応用」の手法を折に触れ指導を

(1)開倫塾の授業では、既習事項についても、何十回、何百回もうんなるほどと塾生全員が納得するまで、ていねいにわかりやすく説明してあげて下さい。

(2)一方的に話すだけでなく、1回の授業で5分位は4人1組でわからないところをよくわかった塾生が教えてあげる「学びの共同体」を実行し、塾生同志の理解の促進を図ることも学ぶ楽しみを育むために大切です。

(3)同時に、一度「理解」した内容をどのようにして「定着」させ、また「応用」力(定期テストで100点が取れること、「希望校」に合格できるだけの得点—偏差値—が取れること)

が身に付くか、その具体的な手法も授業中に時間を取り指導し、実際にその一部を授業中に実行させ、身に付けさせることも大切です。

(4) その際、各自の「一流校」に合格するにはどうしたらよいかも、一人ひとりの塾生に具体的に示し続けて下さい。

3. おわりに一授業中「3分」以上の「武者語り」と、始業式・終業式の徹底を一

(1) 「教育成果を決定する要因」は「本人の自覚」と「先生の力量」の2つで、「先生の力量」の中には「本人の自覚」を促すことも入ると開倫塾では考えます。

(2) 「本人の自覚」を促す組織的な取り組みとして、開倫塾では、(1)各学期の始めには「始業式」を、終わりには「終業式」を各1時間ずつ行うこと、(2)各講習会の始めには「始業式」を、終わりには「終業式」を各1時間ずつ行うこと。

(3) 平常授業、講習会の授業を問わず、ありとあらゆる開倫塾の授業において、先生は3分間以上の「武者語り」を行うことが決められております。

(4) 校長は自ら率先垂範すると同時に、自らの校舎での実施を徹底するようすべての先生を励まし続けて下さい。

(5) 毎月の塾長通信は、全クラスで必ず全ページ塾生に読み聞かせて、大切なところはアンダーラインを引くようご指導下さい。

7月は、夏休み中に新聞を読むことの大切さが示してあります。夏休みの終わりには塾生が一人残らず新聞を読んで考えるまでに校長はしてあげて下さい。

以上、よろしくお願い申し上げます。

—2009年7月5日記—